



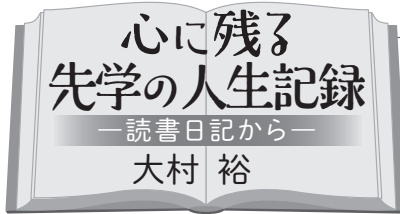
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.209
2021.2.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第20回

A.デズモンド & J.ムーア著／渡辺政隆訳『DARWIN』 (工作舎 1999年)

チャールズ・ダーウィン(1809～82年)は本連載第11回で紹介した田中美知太郎や山内清男が十代の頃、強烈な刺激を受けたイギリスの生物学・地質学研究者である。その名声は世界中に轟き、今なお科学界において種々議論されている稀有な学者である。

本書はダーウィンに関わる詳細な伝記であり、数ある「ダーウィンもの」の中では、最も定評のある著作の一つである。少なくともダーウィン自ら著した自伝(『ダーウィン自伝』ちくま学芸文庫 2000年)よりもずっと面白い。二冊箱入り(合計1042頁)で1万8000円もするのに、その箱には、「数々の賞に輝く世界的ベストセラー」と書かれている。本来当事者の本音を書いた「自伝」の方が面白い筈なのに、この逆転現象は一体何なのであろうか。その主な原因は、ダーウィンを取り巻いていた当時のイギリスの社会状況と家族環境にあったと思われる。神の存在を信じず、進化論を体系的に論じた彼は、政界・宗教界・学界有力者たちから激しい非難を浴びている。ちなみに『種の起源』(1859年刊行)の骨子を確立したのはその十数年前であったのに、それを公刊するのを躊躇したのは、刊行後生じることが予想される非難や、先輩学者たちとの確執を恐れていたからである。それだけではなく、肉体的迫害も極度に恐れていたらしい。社交的な集まりは極力避け、あまつさえ自宅に通じる私道に入ってきた訪問客を密かに見張るために、書斎の窓に鏡を取り付けることまでしていたという(「伝記」10頁)。彼は頻りに原因不明の体調不良を訴えているが、その主要な原因は長年にわたる「引きこもり」と、強い恐怖感にあったのではなかろうか。こうした恐怖が「自伝」をオブラートに包んだような内容にしたのであろう。これに加えて、「自伝」の内容が外部に漏れたときに被る家族の迷惑も、ある程度考慮に入れたかも知れない。さらに、かつて祖父の略伝をダーウィンが書いた時、娘のヘンリエッタに徹底的に朱を入れられ、削除すべき箇所に印をつけられたとある(「伝記」19頁)ので、家族の反発も恐れて、あらかじめ自粛して執筆した可能性もある。しかしそれでも妻や娘たちには気に入られなかったようで、ダーウィン没後、息子のフランシスがこれを出版しようとしたときには、彼らは大幅な削除を要求し(「自伝」巻末の「旧版の削除箇所一覧表」に基づき内訳を確認すると、①キリスト教への懐疑、②不信心の告白、③他人への人物評、④家族の言動、⑤家族に対する思いや妻への賛辞の部分等)、裁判沙汰になる寸前まで事態は悪化しているのである(「自伝」解説)。ちなみに、妻への賛辞の削除要求は恐らく賢夫人エマによるものであろう。

一方、「伝記」の方は、膨大な日記・研究ノート・草稿・手紙・個人蔵書・秘密メモ等を引用して、いささか品のない事実までも赤裸々に記述している。これが面白くない訳はない。本書が公刊されたのは20世紀末であり、もはやキリスト教の重圧やこの宗教に寄生する勢力はほとんど存在しておらず、ダーウィンと直接関係のあった人々も生存していないので、何でも遠慮なく書けたのであろう。

ダーウィンの生涯は、キリスト教(英国教会)と、これに緊密な連携をしている貴族・大地主ならびに彼らの支持を受けていた既成の科学者たちとの壮絶な戦いだったといつてよいと思う。「科学」を「宗教」から解放すること、いわば「宗教革命」の主導的役割を担ったのがダーウィンであった。しかしこの「革命」は宗教・思想・科学の分野に止まらない。時あたかも、既得権を持った貴族・大地主・国教会聖職者たちの勢力と新興のブルジョアジーの勢力が激しく衝突していた時代でもあったのである。これに資本主義の矛盾に苦しむ労働者階級の激しい反抗が加わり、三つ巴の様相を呈していたのであった。特に労働者階級からの攻勢は各地の暴動へと発展して「革命前夜」の様相を呈していたという。こうした新興勢力の精神的支柱として注目を集めたのが、ダーウィンが唱えた自然淘汰説に基づく「進化論」なのであった。かのカール・マルクスが、「心からの崇拜者より」と署名して『資本論』の新版を送って来た(855～856頁)のは、そうした理由からであろう。以下、紙幅の関係でダーウィンの半生の、ほんの一部を紹介することとする。

ダーウィンは生来神経が細く、エディンバラ大学医学部学生の折には、子どもの手術(当時は麻酔なし)を見ていられず逃げ出してしまい、医師になることを諦めている。従って上記のような緊張状態には耐えられなかったことであろう。有能な医師である父からは、子どもの頃、知能が平均以下とみられていたようである。本人も「一生の間にどんな言語もマスターすることができなかった」と劣等感を告白している(「自伝」23頁)。数学も苦手であつたらしい(「伝記」93頁)。しかし彼には人並外れた収集癖と強い好奇心があった。エディンバラ大学退学後、牧師になるためにケンブリッジ大学に進学するのであるが、そこでは甲虫採集に夢中になる。あるとき枯れ木の皮を剥いだところ二種類の珍品を見つける。それらを左右の手に一匹ずつつかんだのであるが、そこへ突然第三の別の種を発見。そのまま逃がしてしまうのはあまりにも惜しいので、右手でつかんだ甲虫を口に放り込み、三匹目を捕まえようとしたところ、口の中の甲虫が毒液を発射したため、これを吐き出してしまふ。この混乱の中で三匹目も逃がしてしまったという。こうしたあくなき収集癖が、ビーグル号による世界探検旅行の折に、大きな力となるのである。すなわち、彼は行く先々で膨大な動植物を捕獲・採取し、保存処置をして調査記録・資料目録と共に本国に送り込んだのである。恩師ヘンズロー等の尽力もあって、これが英国科学界に注目されることとなり、ダーウィンの名声が確立する。こうなると、かつて「能なし」と罵った父親の好意をも引き寄せ、莫大な経済的支援を受けることとなる。かくて彼は自由な研究の経済的基盤を確立したのであった。

不器用で頭脳明晰でなくても、好きなことに深くのめり込む情熱と好奇心があれば、必ずや何事かを成し遂げることが出来ることをダーウィンは私に教えてくれているのである。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第20回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第202回) 與嶺友紀也 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第17回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「帝王紫探訪」 忍澤成視 …4

考古学の履歴書

カナダで米寿をむかえました(第17回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

17. 国際会議2件と役職就任の始まり

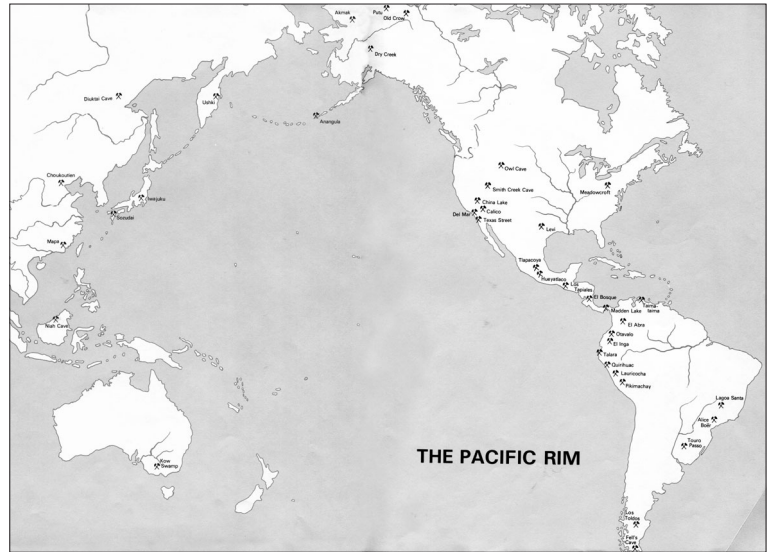
1975年の夏は旧友アラン・ブライアンのお誘いに応じて「環太平洋の視点からみた新大陸の先史文化」(Early Man in America from a Circum-Pacific Perspective)と題するシンポジウムに参加した。ブライアンはハーバードの院生時代からの知り合いで、1957年のワシントン州プリーストラピッズ遺跡の発掘調査で一緒だったことや(アルカ通信No.179)1973年のモントリオール・カンファレンスにはコメンテーターとして参加してもらったことなどすでにふれた(アルカ通信No.201)。1975年当時はカナダ西部のアルバータ大学で教職についており、お隣のブリティッシュコロンビア州で開かれる第13回太平洋学術会議を舞台にして太平洋をめぐる地域を主題とした上記のシンポジウムを計画していた。

新大陸への人類移動に関する当時の学会の定説は陸化していたベーリング海峡を経てBP13,000年頃に新大陸に入った人たちが縮小しつつあった氷床の間にできた通路("ice-free corridor")を南下して北米の無氷地帯に達し、マンモスなどの大型動物を狩猟したクロヴィス型尖頭器文化を形成したというシナリオだった。アランはこの「クロヴィスファースト説」に反対した少数派のひとりで、2010年になくなるまで、クロヴィスより古い遺跡、遺物を学界に提示するのに専心した。このシンポジウムの意図も、アメリカ両大陸でクロヴィス以前と思われる石器文化の起源が太平洋沿岸地域のどこかにあるのではないかと、太平洋の東岸を見渡して検索してみようという趣旨で、そのためには1973年のモントリオール・カンファレンスのような国際的な討議の場を設けたいと言っていた。

実現したシンポジウムはまさに国際的な規模で、R.ジョーンズ氏のオーストラリアの先史時代概観にはじまって、ジェーン・エイグナー、孫宝基、井川史子がそれぞれ中国、韓国、日本について発表したあと、ロシアからデレヴィアノコが後期更新世のアジアから新大陸への人類移動に関する論考を提出、続いてディコフによるカムチャッカ半島のウシュキ遺跡発掘の結果の報告、そしてモチャノフがデクタイ洞窟を含むレナ河上流地方での精力的な調査の現状を報告した。それからアメリカ大陸側に移って、アラスカのDry Creek、カナダ北部のOld CrowにはじまってカリフォルニアのChina Lake、メキシコのTlapacoya、ペルーのLos Taldos洞穴などから得られている最近の資料や年代測定値の報告と議論があった。最後の日はバンクーバー郊外のサイモンフレイザー大学に全員バスで移動して、同大学の所蔵品を持ち寄った遺物の展示を検討しながら活発な議論がはずんだ。

シンポジウムの目的はベーリング海峡の向こう側にどのような石器製作技術がいつ頃あって、それらがアメリカ大陸の早期石器群とどのように関連するかを解明することだった。これについては日本列島の旧石器時代の資料は大いに貢献できると思う。というのは、日本列島は周辺地域に比べて遺跡の数も多く、しかも遺跡の多くが火山灰との層位関係などを通して年代がかなりはっきりしているからだ。私自身、国際舞台に初登場した1968年の第8回国際人類学・民族学会議で「ユーラシア北部と新大陸との先史時代における文化交流の視点からみた日本の旧石器文化」と題する発表をしたことはすでにふれた(アルカ通信No.197)。その後も同様な趣旨の発表を何度かしており、特に鈴木正男博士の先駆的研究に始まる黒曜石の原産地検索の結果、神津島の黒曜石が本州に3年以上も前から搬入されていることが明らかになって以来、ベーリング海峡からそう遠くない太平洋沿岸にかなりの航海技術を持った狩猟採集民がいたという指摘してきた。

バンクーバーでの学会が8月29日に終わって月末に帰宅、9月1日から新学年に面したわけだが、この新学年は私にとって新しい経験の始まりだった。というのは私がサバティカルで留守中に、人類学科の同僚が私を人類学科長に選出、それが学部長、理事会の承認を経て9月1日付で着任することになっていたからだ。当時の人類学科の教員数



▲ブライアン編のEarly Man in America from a Circum-Pacific Perspective, 1978より

は10名くらいだったと思うが、そのほとんどが私より年功を積んだ人たちだったのに、どうして准教授に昇進したばかりの私を選出したかという、「女性にもかわからず」ではなく、「女性だったから」、しかも日本人の女性だったからようだ。その頃の人類学科の有力な教授陣は日本でもよく知られている考古学者のブルース・トリガー博士のほか、ハーバードでの先輩で途上国の発展過程を経済人類学の立場から研究しているリチャード・ソールズベリー博士、これとは対照的にマルキシズムの見地からアフリカの労働者問題を扱っているピーター・グトキンド博士という顔ぶれだった。それぞれ御自分の意見を強力に主張なさる方達だから、社会学から分離したばかりの人類学科の将来などに関する意見がまとまらないのは当然。日本人女性は「おとなしい」はずだから、随意に操れるだろうと各人内心期待して新参の私を学科長に立てることに意見が一致したようだ。其の頃は北米でも女性の学科長は少くて、9月1日に新学年最初の人文学部の学科長会議に出席した際、約20名の学科長のうち女性は私一人だけだったのにおどろいた。大学の管理職は学長以下ほとんどが男性だったころなので、女性を学科長に選出した人類学科は当時としては「進歩的」な姿勢を示したのかもしれない。いずれにしても現在はマギル大学の学長も人文学部長も女性だから時代はかわったものだ。

その後2003年末に引退するまでマギル大学に勤務した35年間の40%に当たる15年間はなんらかの役職を務めることになったが、この人類学科長就任がその始まりだった。お役目を持っているあいだは研究活動や学会出席が制限されることになるが、1975年の秋はノボシビルスクにあるソヴィエト連邦科学アカデミーのシベリア支部で、歴史・哲学・言語学研究所長をしていられたA.P.オクラドニコフ博士が計画していられた「シベリアの古代文化と太平洋近隣地域の諸文化との関連」というシンポジウムに予定どおり参加させていただくことにして、10月19日にモントリオールをたち、25日帰国という駆け足のシベリア旅行をした。シベリアは初めてだったし、海外旅行はしばらくできないかもしれないからというつもりでもあった。

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学卒業
1953-54年	東京都立大学【現：首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーバード大学に留学
1956年	ラドクリフ大学(ハーバード大学の女子部【現在：ハーバード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーバード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員：2009年以來名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 202

徳之島カムイヤキ陶器窯跡 ～鹿児島県伊仙町～

よみね ゆきや
與嶺 友紀也

私が紹介する遺跡は、徳之島カムイヤキ陶器窯跡です。徳之島とは、琉球列島の中、奄美諸島の真ん中に位置する島です。徳之島の中央から北側にかけては山地が広がり、山地を取り囲むように石灰岩台地が発達し、海岸にはサンゴ礁が取り巻いています。徳之島カムイヤキ陶器窯跡は、徳之島南部の伊仙町に所在し、昭和58年に伊仙町在住の研究者である義憲和氏と四本延宏氏によって発見されました。昭和59年に緊急の発掘調査が行われた後は、平成8年から平成16年までの各年に確認調査等が行われました。そして本遺跡が琉球列島最古の大規模な中世窯跡群で、グスク時代(平安時代後期～室町時代並行)の生産・流通を知る上で重要なことから、平成19年2月6日に国指定史跡に登録されました。



▲徳之島カムイヤキ陶器窯跡 窯跡検出状況

徳之島カムイヤキ陶器窯跡は、ヒラスク山(標高211m)を中心とした丘陵地に広がります。操業年代は11世紀～14世紀代と考えられ、窯跡はイチジク型の平面形態で、地下式窯だったと推定されます。生産品は、カムイヤキと呼ばれており、生産器種は、壺を中心に甕・碗・鉢・水柱などです。器種構成からは、中世日本の窯業生産の特徴が見られる一方で、カムイヤキの製作技法および窯体構造からは朝鮮半島の影響が指摘されており、カムイヤキの出自を考える上で重要な要素となります。カムイヤキは琉球列島一帯を中心に分布し、一部南九州や西北九州でも確認されています。カムイヤキはグスク時代の遺跡で普遍的に確認されることから、カムイヤキが琉球列島における、当時の生活様式に重要な役割を果たしていたことがわかります。

伊仙町に非常勤職員として来た平成30年度から現在まで(令和元年度より職員)、このような重要な遺跡である徳之島カムイヤキ陶器窯跡の調査・整理・活用の面において、関わっていることは幸運なことと感じています。

平成30年度には、シンポジウム「きて、みて、まなぶ徳之島のカムイヤキ」の開催に関わりました。シンポジウムは、再接合されたカムイヤキの展示ブース、専門家の先生に自由に質問できるポスターブースと焼き物製作や接合体験ができる体験ブースで構成され、私は焼き物製作の体験ブースを地元の陶芸家の方と担当しました。体験ブースには、カムイヤキに興味のある方はもちろん、体験だけを目的にいらっしゃる方もいました。当初カムイヤキ自体に興味はなくとも、焼き物を作る過程を通してカムイヤキに興味を持ち始める方が多かった印象を受けます。

遺跡や地域の歴史に興味を持ってもらうには、様々な切り口で伝える手段があることを実感させられました。

そして令和元・2年度は、カムイヤキの積み出し港を探す水中調査にも関わりました。この水中調査は伊仙町だけではなく、隣町の天城町・徳之島町と連携して徳之島3町で平成29年度より行われていましたが、私は泳げないこともあって伊仙町へ来た当初は躊躇していました。しかしまだ見つからないグスク時代の港への好奇心と、先輩学芸員であった新里亮人氏(現 熊本大学埋蔵文化財調査センター助教)の「泳げなくていい。沈めればいい。」との言葉をうけ、ダイビングのライセンスを取得し、水中調査に参加することにしました。まだまだ調査技術は未熟ですし、グスク時代の港となる確実な証拠は見えていません。しかしその手がかりになる基礎的な情報が蓄積しつつあります。正直、今でも潜水する直前は緊張します。しかし潜水作業自体は楽しく、近世以降の礎ではありますが、水中で見つけると、この礎を搭載した船のことや礎をこの地で切り離すことになった状況を妄想してワクワクしてしまいます。

また徳之島カムイヤキ陶器窯跡は膨大な資料をもつことから、これまでは一部の資料のみが報告されていました。平成28年度から徳之島カムイヤキ陶器窯跡出土資料の再整理が行われ、私は再接合された資料の実測を主に行っております。再接合の結果、ほぼ完形に近い状態となり、焼きひずみや破裂の具体的な状況も明らかになってきています。焼きひずみや破裂の状況は、まさに生産地でしか見られない資料の特徴ですし、小破片資料の多い琉球列島の中で、カムイヤキの全形を伺える資料が多いことも重要です。この資料群の中から、いかに情報を引き出して、実測図に反映させるか、日々頭を悩ます一方で、これまでにない貴重な資料を図面化できる喜びをかみしめています。

徳之島カムイヤキ陶器窯跡に向き合いますと、遺跡の重要性やこの遺跡に取り組んできた諸先輩の背中の高さを感じ、私の力が遺跡にまったく釣り合っていないと感じます。しかし、そうとばかりも言ってもらえません。日々研鑽を積み、諸先輩方のように徳之島カムイヤキ陶器窯跡の調査・保存・活用に取り組んでいきたいです。



▲カムイヤキ集合

参考文献:

- 青崎和憲編 2001「カムイヤキ古窯跡群Ⅲ」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(11) 鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会
- 新東晃一・青崎和憲編 1985「カムイヤキ古窯跡群Ⅱ」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会
- 新東晃一・青崎和憲・中村耕治・井ノ上秀文編 1985「カムイヤキ古窯跡群Ⅰ」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会
- 新里亮人編 2005「カムイヤキ古窯跡群Ⅳ」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(12) 鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会
- 新里亮人 2018「琉球国立成前夜の考古学」同成社

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは山元瞭平さんです。

考古学者の書棚

「帝王紫探訪」

吉岡常雄／紫紅社(1983)

忍澤 成視

はじめに

本紙208号で、「知っているようで知らない貝の話 特集 貝殻新書」を紹介した。ここでは触れられなかったが、私の興味を引いたものに、「帝王紫 貝で染める」というコラムがある。「貝好き」としては、「貝紫」という貝を使った染物があることは知っていたが、「帝王紫」なる言葉を聞くのは初めてで、紙面のカラーグラビアの何とも高貴な色合いの染物に驚き、早速ネットを手繰って、ここに紹介されていた書籍を購入、一読して著者の情熱と行動力に触れ感服した。人は、何かのきっかけで突き動かされ、一気に研究が進展する瞬間がある。後述するが、筆者も同じような経験をし、今も情熱を傾けある貝に対する研究をライフワークとして取り組んでおり、著者の姿に共感を覚えた。

1 著者の経歴と研究のきっかけ

著者の吉岡常雄氏は、京都に江戸時代から続く染物屋の四代目で、染色科で学んでいた学生時代、教科書で読んだ数行の記述をきっかけに、後に貝紫の研究に邁進することになったと言う。

自然の色素を使った染色といえば、東洋では草木染めが一般的だが、ヨーロッパや南米には、古くから貝を使った染色法があった。その色合いは紫で、希少で優雅な貝紫は、時の皇帝に愛され「帝王紫」と呼ばれるようになった。

2 「帝王紫」に魅せられ世界を旅する

世界各地で人びとを魅了したのは、単に珍しく美しい色合いだけではない。そもそも紫の染料は、特定の貝種の軟体部中にある。貝体内の薄い外套膜を剥がし、エラのすぐ横のパープル腺にある分泌液がその原料だ。パープル腺を取り出してすり潰し、糸や布に塗布し、紫外線を当て酸化することで、薄い緑色、濃い緑色、そして赤味を帯びた紫色へと変色する。このパープル腺をもつのは、貝の中でも肉食性のアケガイ科の巻貝にしかない。パープル腺は、神経を麻痺させる物質を含んでおり、アケガイ科の貝は、餌とする他の貝を攻撃し、逆に捕食者から身を護る際にこれを使うのである。日本では、アカニシ、イボニシ、レイシなど数種が知られるのみ。しかも、一個体の貝から採れるのは耳かき一杯分というから、一グラムの色素を得るのに、二千個もの貝を要する。この特性からくる希少性が帝王紫たるゆえんである。材料が貝殻というのなら、死んで浜などに打ち上げられたものを採集するという方法で事足りるが、生きた貝、しかも干潟の砂浜でなく、波浪の影響をまともに受ける岩礁帯で大量に集めるとなると、その作業は容易ではない。

著者は、1967(昭和42)年、奄美大島節子の浜にてアケガイ科のヒロクチガイレイシを採集、染色実験に成功したことから、世界各地に帝王紫を追う旅を開始する。本書が出版された1983(昭和58)年まで17年間、メキシコ、ペルー、フランス、イタリア、レバノンなどに残る書物や古代遺跡の染物、現生貝調査、染色復元を続け、この間、調査研究成果を論文や講演で発表している。メキシコのドン＝レイス村へは実に6度も訪れているという。

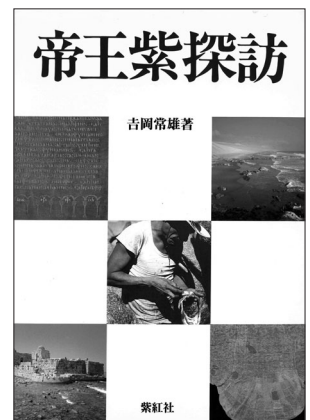
3 弥生時代の「貝紫」発見の衝撃

帝王紫は、紀元前三千年ほど前の古代文明の時代、中東、北アフリカ、ヨーロッパ、中南米など世界各地に航海術の発達にも牽引され広まった。アジアへの伝搬は知られていなかったが、平成になって間もない頃、衝撃のニュースがもたらされる。現在、国指定史跡となっている佐賀県吉野ヶ里遺跡の弥生時代中期から後期の墓で見つかった染色布が、実は貝紫で染め抜かれたものであることが判明したのである。

著者は、著書出版後間もない1988(昭和63)年病没している。氏の貝紫の研究は、奄美大島や三重県志摩半島などでアケガイ科の貝を採取してはじまっているが、わが国の弥生時代に貝紫の染物が存在していたとは思っていなかっただろう。これらがどのような系譜で日本列島にもたらされたのかは、今後の研究課題だ。

おわりに 本書と私の関わり 「幻の貝」を求めた調査研究

日本列島の先史時代に、「幻の貝」と呼ぶべき貝がある。その名は「オオツタノハ」、縄文時代、弥生時代、古墳時代の考古学研究者には馴染みのある貝だ。およそ六千年もの間、貝の腕輪(貝輪)専用に使われている。殻長は最大10cmにもなる日本列島最大のカサガイで、岩礁に貝殻一枚で張り付いている。日本列島近海には六千種以上もの貝が生息し、微細な種ともなると、未発見であったり、調査が行き届かなかったりと研究が進まなくとも無理はない。しかし、貝殻サイズが10cmにもなる貝で、貝類学者すら分布、生態などほとんど知らないものなどそう多くはなからう。今から20年前、考古学研究における現生貝への疑問が何一つ解明できない状態から、私のオオツタノハを追う旅は始まった。以来、伊豆諸島で10年、南西諸島で10年と、今もこの貝に対する考古学、生物学的調査研究を続けている。前者では、八丈島・御蔵島・三宅島にて、後者では奄美大島・屋久島・種子島にて、その生息と生態実態をつきとめた。黒潮の影響下にある岩礁海域、潮間帯の中部から下部、大潮の最干潮時にしか姿を現さない特殊環境に生息する。この貝の希少価値は、捕獲の困難さに他ならない。自らの労苦をもって知る古代人の営みの実態、吉岡氏の帝王紫を追う世界各地への旅に、私の20年を重ねた。



アルカ通信 No.209

発行日 2021年2月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp